

幼児教育アドバイザーは幼稚園の研修にどのように関わっているか

— 幼稚園への働きかけを経時的に捉える —

山崎 晃¹・越中 康治²・松井 剛太³・濱田 祥子⁴・東 和子⁵

本研究の目的は、幼児教育アドバイザーの助言や指導・支援が時期によりどのように変容していくかを確認することであった。本研究では、幼稚園における約1年間の幼児教育アドバイザーの指導の変化を4期に分けて検討した。その結果、第1期は子どもの発達の状況、園や保育者・保育の課題に言及、第2期は幼稚園、保育所と小学校の組織やシステムの違いを認識することや保育者の幼児に対する指導・援助・保育に言及、第3期は幼稚園と小学校の指導の違い、幼児の発達段階、幼児の発達の解、保育者の省察の重要性などに言及、第4期は“保育内容や発達を確実に捉えること、保育者自身の認識や行動を変えようとする心構えが幼児教育の質を向上させることなどをアドバイス・指導に言及していた。このような結果は、時期によるアドバイス内容の経時的変化が見られることを明らかにした先行研究と大枠では一致していた。また、幼児教育アドバイザーの指導内容や研修に重要な示唆を与えるものであった。

キーワード：幼児教育アドバイザー、指導・支援、経時的変化、研修

「幼児教育の推進体制構築事業」（文部科学省、2016）において、生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児期の教育は重要なものとなり、質の高い幼児教育の提供が期待されるようになった。しかし、現状では、そのための方策として幼稚園、保育所、認定こども園等の幼児教育施設の教職員に対する研修体制をはじめ、地方公共団体における幼児教育の推進体制は必ずしも十分でない。そのため幼稚園、保育所、認定こども園等を通して幼児教育の更なる質の向上を図るための施策の一環として、各施設等

を巡回して幼児教育の専門的な知見や豊富な実践経験を有し、域内の幼児教育施設等を巡回し、教育内容や指導方法、環境の改善等について指導・助言等を行う「幼児教育アドバイザー」（文部科学省、2018）の育成・配置が求められることになった。「幼児教育アドバイザー」に関しては様々な議論が行われ導入された（阿部、2017）。

幼児教育アドバイザーに関する先行研究として以下のような研究がある。文部科学省の幼児教育の推進体制構築事業における幼児教育アドバイザーの地方公共団体ならびに幼児教育の現場へと展開される際の課題と可能性についての研究（高島、2018；2019）、「推進事業」の実施や「推進事業」において「幼児教育アドバイザー」の導入が目指された背景に関する研究、

所属

- | | |
|-------------|----------|
| 1：広島文化学園大学 | 2：宮城教育大学 |
| 3：香川大学 | 4：比治山大学 |
| 5：元広島市教育委員会 | |

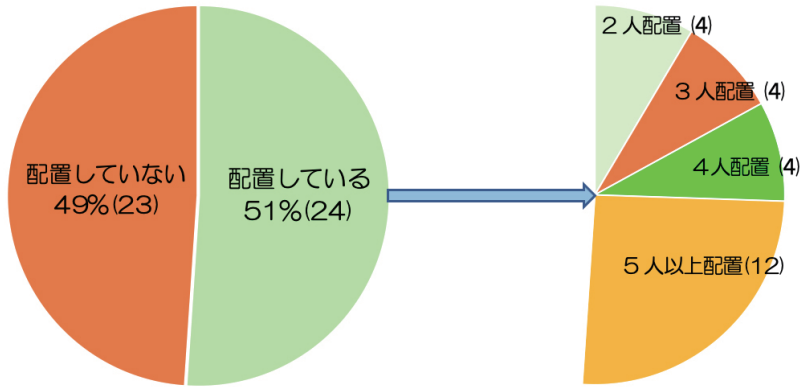


図1 令和元年度幼児教育アドバイザー配置の実態調査結果（文部科学省、2020）

幼児教育アドバイザー訪問事業の効果（清水・濱田・上山・杉村、2021）、幼児教育アドバイザーによる継続訪問の効果（上山・杉村・清水・濱田、2021；田島・中坪、2021）、保育の質との関係（七木田、2021）の研究などがある。また、幼児教育アドバイザーを現場にどのように配置するかについて、ベテラン・リーダーの上に位置づけることを提案している研究もある（保育教諭養成課程研究会、2018）。

文部科学省（2021）は、「幼児教育推進体制の強化」の資料において、幼児教育アドバイザーの幼児教育に関する理解、ファシリテーションに関する理解、その他、園の要請に応じて必要な専門性を挙げている。また、幼児教育アドバイザーの育成については地方自治体で様々な実践がなされている。大阪府（2020）においては、経験3年以上の保育士、幼稚園教諭、保育教諭、並びに府立視覚支援学校・聴覚支援学校の幼稚部の教諭を対象として、中核となって研修を実施するためのファシリテーション能力や新規採用者等経験の少ない教員への指導助言など、幼児教育の推進に貢献できる専門的資質・能力の向上を目的として、シラバスに基づく9回の幼児教育アドバイザー育成研修を実施している。また、幼児教育の推進体制構築事業に位

置づけられた保育アドバイザーの活動に関する実態の報告もある（北九州市、2018）

文部科学省（2020）による令和元年度幼児教育アドバイザー配置の実態調査結果を図1に示す。図1に示されているように、全都道府県の51.1%が幼児教育アドバイザーの配置をしているが必ずしも十分には浸透しているとはいえ、また、配置された員数も十分ではないことがうかがえる。幼児教育アドバイザーを配置した効果に関する研究によれば（東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター、2017）、幼児教育アドバイザーの配置により、気になる子への支援等について担当課間の情報共有や連携がしやすくなり、幼稚園を小学校の視点から、的確に指導してくれるとの回答があったという。他方、研修に参加できない保育者の資質向上、園内研修機会の確保不足や勤務形態・雇用形態の差異、施設間の横のつながりが少ないこと等があげられている（東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター、2017）。

佐々木（2019）は、幼児教育アドバイザー配置の成果について検討した。その結果、保育者や園長の資質向上、特別な支援を必要とする子どもに関する支援、園内研修機会の確保・質



の向上、幼保小連携の推進が成果として捉えられていることを明らかにした。

幼児教育アドバイザーの普及に関する課題として、阿部（2017）は、(1)全般的に施設の職員には研修の時間が限られており、研修会を開催しても、シフトや雇用形態などもあり、出席できる職員は正規の職員などに限られてしまうこと、(2)私立幼稚園は、建園の精神があり、こちらのメッセージを受け止めてくれない傾向があること、(3)施設間の横のつながりが少ないこと、(4)アドバイザーが教育・保育内容の指導・助言方法や研修会のあり方等について学び合う機会を充実させること、(5)他市の情報・実態が分からないこと、(6)国や県への役割への期待、(7)アドバイザーが私立施設に入っていくのは敷居が高いので、何らかの法的な裏付けが必要であることなどを挙げている。

関（2017）は、アドバイザーの主な業務内容は、幼児教育施設等の巡回助言、幼保小の連携に関する助言、研修の開催や講師、特別な支援を必要とする子どもへの支援などであることを示している。しかし、管見の限り、幼児教育アドバイザーに関する先行研究において実際にどのようなアドバイスや指導の変化が見られるかについての研究はほとんど見当たらず、山崎・越中・松井・濱田・東（2021）の研究がある程度である。アドバイスの内容の時期による変化については明らかにされているが、一事例であり、その結果がどの程度一般性があるかを確認することが必要である。このような検証をとおして、幼児教育アドバイザーの幼稚園での不易なアドバイスが明らかになり、幼児教育アドバイザー研修プログラム構築の資料となり、プログラムの実装化につながる可能性がある。すなわち、幼児教育アドバイザーのアドバイスや助言がどのように変化しているかを捉えることは、幼児教育アドバイザー役割を詳らかにし、

アドバイスを受ける幼稚園の保育者の意識・認識・行動の変容をもたらし、結果として教育の質の向上に資する。

本研究では、幼稚園における約1年間の幼児教育アドバイザーの指導の変化を4期に分けて検討する。それぞれの期における指導の特徴を明らかにすることは、幼児教育アドバイザーの指導内容の適切性、妥当性、さらにはこの幼児教育推進体制構築事業の評価に資することになる。

以上のことを踏まえ、本研究では、幼児教育アドバイザーの幼稚園での助言や指導・支援がどのように変容していくかを時系列的に確認することを目的とした。

なお、幼児教育アドバイザーによる指導・支援の内容の経時的変容を捉えるために、幼稚園を訪問した8回を4期に分けた。4期に分けることによって導入、展開・発展、省察、まとめのプロセスの解明が期待される。

方法

1) インタビュー対象者

H市公立幼稚園に勤務した後、幼児教育アドバイザーを委嘱された園長経験者1名である。

2) 対象園、インタビュー時期、回数

H市内にある公立幼稚園であり、インタビューは、201X年5月から12月まで毎月、計8回、幼稚園訪問直後に行った。時期を第1期（5月、6月、7月）、第2期（8月、9月）、第3期（10月、11月）第4期（12月）の4期に分けた。

3) インタビュー内容の骨子

先行研究（山崎ら、2021）に倣い、あらかじめ決められた質問項目に沿ってインタビューが行った。(1)園の実態・幼児の実態・雰囲気の影響、(2)研究主題や園内研修の実施とその内



容、(3)運営の仕方、(4)幼児教育アドバイザーの役割・期待、(5)異なる視点からの事例・指導と幼児教育に係る姿勢の重要性、(6)具体的な指導内容、(7)事例研究の進め方、(8)事例の捉え方、見取りの視点、理解の枠組み、(9)多様な視点を持つことの重要性に係る内容を大枠とした質問に対して回答を求めた。曖昧な表現の場合は再度確認の質問を行った。

インタビュー内容は録音し、インタビュアーとインタビューの会話の内容を文字に起こした。本研究では、インタビュー対象者の発言のみを分析対象とした。

4) 分析方法

分析の対象としたデータについて KH Coder (kxcoder-3b04a) によるテキストマイニングを実施した。

結果と考察

1) 期による指導・援助内容の経時的変化

(1) 特徴語の違い

幼保小連携交流の期による指導・援助内容の違いを明らかにするために、KH Coder (樋口、2014) により、第1期から第4期の特徴語を抽出した。表1に示すように、第1期では保育

者の幼児の行動の捉え方などに関連する語が多くみられた。第2期では幼小連携に係る事項が特徴語としてあげられていた。第3期ではエピソード記録を題材として、幼児の言葉や行動の捉え方について議論しながら理解を深めることに関連する語が多くみられた。第4期では幼児同士の行動についての解釈と他の保育者の意見を聞くこと等の語が特徴語になっていた。

また、複数の期に重複する語があり、第1期では保育者、思う、姿、第2期では保育者、第3期では幼児、姿、言う、思う、良い、第4期では言う、幼児、良いが重複していた。全期を通じて幼児やその姿、保育者、良い、思う、言うなどが共通していた。

次に、特徴語に関する結果を確認することができるように期毎の自由記述内容を検討した。

(2) アドバイスの内容の変化

各期の指導内容を明らかにするために、主要なアドバイスの内容を要約した。各期に以下のような特徴が見られた。

第1期では、実際の子どもの姿や指導について

「 」はインタビュー記述の引用

『 』は幼児教育アドバイザーの言葉

表1 第1期から第4期の特徴語

	第1期	第2期	第3期	第4期
保育者	.259	話 .239	先生 .273	みんな .203
絵本	.225	それ .176	幼児 .211	言う .153
思う	.224	時間 .164	姿 .190	幼児 .143
姿	.184	保育者 .141	言う .189	女兒 .133
自分	.176	幼稚園 .139	思う .189	トラブル .130
気持ち	.172	読む .136	良い .186	分かる .130
実態	.165	話す .134	感じる .173	私 .128
保護者	.157	交流 .131	見る .154	良い .127
いろいろ	.147	持つ .129	エピソード .144	聞く .122
具体	.140	工夫 .124	はい .144	クラス .121

□で囲んだ語は二つ期で特徴語として抽出された語である。



て具体的な事例を取り上げ、そこでも幼児の姿や保育者の捉えや対応に関するアドバイスが行われた。たとえば、「おもちゃを取り合うとか、順番が守れないとか、喧嘩するとか、手が出るとか」のように保育者が否定的に捉えていた幼児の姿を、幼児教育アドバイザーが『入園して1か月半の段階で、その行動を気になる姿ではなくて自分のありのままの姿を表現できているということで、どれもとても大切な姿ではないか』と捉えることができること、多様な視点からの事例を見たり、解釈したりすることの重要性を示していた。また、保育者が保護者との情報共有や連携、信頼関係を構築することの重要性・必要性やそのときの注意点など、を説明していた。さらに、当該園の研究主題である「気持ちを大切に、友達と遊ぶ子を育てる」に沿った幼児の姿をどのように捉えることができるかについてもアドバイスがなされていた。具体的には、『初めて幼稚園の集団生活に入ったのですから、まずはこの段階では、自分の思いが、しっかりこのクラスの中で表現できているかどうかを見ること。自分のありのままの姿や気持ちが表現できているかが大切です。幼児が我慢しないで自分の思いがしっかり出せているかという視点で捉えをしてみてください。』とアドバイスしていた。このように第1期は、保育者が幼児の発話や行動等の実態を捉えることや保育者間の共通認識の重要性について解説を主としてアドバイスが行われていた時期であった。

第2期では、幼稚園と保育所と小学校との連携についての話し合い、交流内容、教育要領の違いについて理解を深めるための時間の確保・工夫、絵本の読み聞かせをする場合の配慮等について、保育者間での共通認識・共通理解の重要性を解説していた。一つの事例議論し、様々な見方や解釈ができるようにするためにエビ

ソードを書き、それを保育者で共有することの重要性を説明していた。研修を重ねた結果、保育者の記録の取り方や幼児の言動についての捉え方や見方が変容していく姿が述べられていた。幼児教育アドバイザーは、「研修回数を重ねることで、先生方がすごく積極的に話をしてくださるなと思いました。『これならうちでも取り入れられるね、うちではこのようなことしている』と積極的に話されている」と述べていた。

また、「継続的な連携や合同研修会での学びを共通認識できました。『お互いを知る、違いを知る努力をする事は、特別なことではなくて、話し合いができるような時間を持つ工夫をし、単なるイベントに終わらせないこと。難しいと考えすぎないで、まずできることから始めよう』そのような発言が出るようになった点はすごく大きな収穫ではないかと思います。参加できなかった先生も資料を見直しながら連携のポイント、違いを知る、一緒に考えて準備をする、話し合いの時間を大切するなど、交流の担当者だけに終わらないで、みんなのものにしていく工夫をしようということを共通認識し、実際にできることをやっという構えが大いにできたし、自己改革にも繋がると思います。」と述べていた。第2期は、保育者の意識や行動の変容を図るためのアドバイスが行われた時期であった。

第3期では、幼保小連携の交流事業として行われた小学校授業参観でみられた児童の学びの姿やエピソード記録を用いた研修会において、保育者・小学校教師が同じ幼児・児童の行動をみたり、エピソードを読んだりしても幼児や児童の行動・姿の捉え方が異なる場合があることを説明していた。その中で、幼児指導・支援の違いにつながる事例があることを説明していた。また、登り棒に挑戦するRの事例で『で



きないという」Rとそれを指導する先生とのやりとりを見ていたM子が「頑張れるよ、だっていつもお部屋で“がんばりまんの歌”を歌っているからきっと頑張れるよ」とRに声をかけ、隣の登り棒の高さまで登って“がんばれ”と応援した。“M子ちゃんと一緒にあそこまで行けるよ”と保育者も励ました。R君は(ゴールの)青色テープのところまで行ってタッチすることができた。その様子を見ていた保育者は“がんばったね、やったね”M子が応援してくれたから登れたねと幼児二人に声をかけて、喜び合った。この事例について幼児教育アドバイザーは保育者の、Rのやりたいという気持ちやM子の思いやり行動に気づき、支援したことは高く評価されると保育者に伝え、保育者の自己効力感を高めるようにアドバイスしていた。このように幼児教育アドバイザーは、エピソードに示された幼児の姿・行動や発達についての多様な見方、捉え方、解釈、認識の仕方が可能であり、その多様性の情報を共有することが重要であることを説明していた。

エピソードを記録することがどのような意味を持つかについても繰り返し説明していた。たとえば、「一コマを切り取った姿から、幼児の発達段階や実態など、皆で把握し合うことができ、また教師の役割や援助の在り方について考え合うことで、意識や意欲の向上につながってきたと思います。エピソードに書くことによって、みんなに周知できるし、この対応はよいねとか、よく気が付いたとか、共感・共有し幼児の変容を見逃さない姿勢など、教師の資質向上にもつながっている。「他の先生方に知ってもらいたい、伝えたいと、幼児の行動の後ろにある気持ちを推し量りながら、丁寧に書こうとする」、「“保育がうまくいかない姿も出して皆で考え合おう”という提案は、トラブルについて“困ったで”終わらせず、そのことを保育者が

話すことで、他の保育者の意見を聞くことにつながり、保育者の力量も感性も高めることにつながり、幼児も自分を振り返り、気付いて、学ぶチャンスになるのですから。」と助言していた。保育における保育者の思いや感じたことを文章化し、それを全員で共有することが保育の質の向上につながり、保育者の力量形成にも幼児の成長にもつながるようにアドバイスしていた。第3期は、エピソードの事例を保育者全員が共有し、幼児の行動の捉え方、行動の背景を考えることの重要性、それらを受けた実際の指導について多様な意見を聞き認識することが保育者の力量をあげ、保育の質の向上につながることを繰り返しアドバイスした時期であった。

第4期では、園内研修トラブルのエピソードを活用しアドバイスが行われていた。ここでも幼児の発達の捉え方・理解と指導・支援・言葉掛け、解釈の多様性などについての議論と保育者の変容、さらに幼児教育アドバイザーの役割についてのアドバイザー自身の考え方が記されていた。

具体的には、トラブルの際の介入について「一人一人を表面的に捉えるのではなく、その背景や、どんな気持ちだったのかを感じ取ろうとする姿勢が見られています。話し合う経験を積み重ねることで、率直に“私だったらこうしてみるかな”と発言するようになっています。結果だけを考えるのではなく、多様な可能性を考え背景を考えるという思いが表現されるので、よい傾向だと思います。」と述べていた。また、保育者の保育アドバイザーの受け入れ姿勢の変化と幼児教育アドバイザーの姿勢について「先生方の取り組む姿勢は、最初の頃と比べて全く違います。以前は、話をしても反応がほとんどなく、私の方が話し、結論まで言うてしまうという一方向でした。複数の先生が参加している



のですが、一対一の会話になりがちだったので、アドバイザーは聞き役に徹する方が効果的です。たとえば、私が『それは、どうして、その本を読んだの』とか『先生はその原因は何だと思う』とかと質問して、そこから先生方の発言や話題がまた広がるようになってきています。それも研修会を積み重ねてきてよかったと思うことです。『先生方も幼児も成長し、周りの子も成長して変容しているので、見方を変える必要はないという考えでは良くない』と思います。『先生方も絶えず心を磨いて、アンテナを張って、試行錯誤、創意工夫をしていかなければならない』と共通認識いたしました。」と述べていた。このように第4期は、幼児の発達と指導、解釈の多様性などについての議論の重要性の再確認とそれらに係る保育者自身の変容、さらに幼児教育アドバイザーの姿勢や在り方などを示した期であった。

以上のように、幼児教育アドバイザーの指導・支援について、第1期は子どもの発達、園や保育者・保育の課題等への言及、第2期は幼稚園、保育所、小学校の校種の違いによる様々な違いを認識することやエピソード記録の事例について話し合いをすることによる保育者の指導・援助・保育内容への言及、第3期は小学校授業の参観をとおして、幼稚園と小学校の指導や幼児の発達差等についての学び、発達を多様に捉えることや解釈の重要性、具体的に行った保育内容や指導について保育者自身が省察することの重要性などに言及、第4期は保育内容や幼児の姿・行動や発達の違いを確実に捉え、保育者自身の認識や行動の変容が幼児教育の質の向上につながることに言及していた。また、幼児教育アドバイザーの役割と行動についての提言が示されていた。

以上述べてきたように、時期によって指導や助言内容の変化が明らかになったことは、幼児

教育アドバイザー配置の効果に関する研究による情報共有や連携が促進された研究結果（東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター、2017；佐々木、2019）とは別の側面から幼児教育アドバイザーに関する研究内容を深めたといえよう。

本研究の結果と山崎ら（2021）の研究結果を比較することによって、保育者や幼児教育アドバイザーの認識の変容が普遍的ものであるかを検討した。その結果、以下のような共通点と相違点が見出された。第1期については、共通点は保育や保育内容に関することであり、相違点は2021の研究では研究の進め方、幼小連携の意義などについて、本研究では幼児の発達についてアドバイスされていたことにあった。第2期については、共通点は小学校との交流をとおして何を学ぶか、保育者は何を考えておくべきか、指導・援助・保育内容・保育方法等に関するアドバイスであった。相違点は2021の研究では園内研修の内容があげられていたが、本研究ではあげられていなかった点である。第3期については、共通点は幼児の発達の姿や行動の捉え方・受け止め方・解釈、保育方法があげられていた点である。相違点は本研究では保育者の保育に関する省察の重要性があげられていたが、2021の研究には見られなかった点である。第4期においては、共通点は保育内容や保育方法や発達について、保育・幼児教育の質の向上についてアドバイスが行われていた点である。相違点は2021の研究では保育者の保育内容や保育場面での特定の幼児との関わり方などの保育方法について、本研究では保育者自身が行動を変えようとする心構えを持つことの重要性が語られていた点である。

以上のように、第1期から第4期の幼児教育アドバイザーのアドバイスの時系列的変化については、大筋ではプロセスはほぼ同じであっ



た。幼児教育アドバイザーの幼稚園での助言や指導・支援がどのように変容していくかが時系列的に確認されたといえよう。しかし、対象の幼稚園も異なり、幼児教育アドバイザーも異なることから、今後さらに事例を重ね、幼児教育アドバイザーのアドバイスの道筋を明らかにし、幼児教育アドバイザーの研修などに実装化できる研究が必要となるであろう。

【引用文献】

- 阿部慶徳 (2017). 文部科学省の事業実施における広域自治体と基礎自治体 —「幼児教育の推進体制構築事業」を事例として— 自治総研、通巻 500 号、79-99.
- 上山瑠津子・杉村伸一郎・清水寿代・濱田祥子 (2021). 幼児教育アドバイザーによる継続訪問の効果：所感の変容の分析から 幼年教育研究年報、43、25-34.
- 大阪府 (2020). 令和 2 年度幼児教育アドバイザー育成研修実施要項 https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/5499/00359700/R2adviser_sirabus.pdf (2021/01/29 採録)
- 北九州市教育委員会 (2018). 平成 28 年度～平成 30 年度「幼児教育の推進体制構築事業」最終報告書 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/05/07/1416251_8.pdf (2021/01/29 採録)
- 佐々木織恵 (2019). 第 1 章 全国の都道府県及び市区町村を対象とする質問紙調査の報告 平成 30 年度「幼児教育の推進体制構築事業の成果に係る調査分析」成果報告書、1-19. (2021/01/29 採録)
- 清水寿代・濱田祥子・上山瑠津子・杉村伸一郎 (2021). 広島県における幼児教育アドバイザー訪問事業の効果検証：3 年間の縦断的検討 幼年教育研究年報、43、5-13.
- 杉村伸一郎・上山瑠津子・濱田祥子・清水寿代 (2021). 幼児教育アドバイザー所感における助言の内容とタイプ 幼年教育研究年報、43、15-23.
- 関智弘 (2017). 平成 28 年度「幼児教育の推進体制構築事業」実施に係る調査分析事業成果報告 7、24-37. (2021/01/29 採録)
- 高島裕美 (2018). 「幼児教育の推進体制構築事業」の展開に関する一考察 北海道における「幼児教育アドバイザー」事業に焦点を当てて 人文・自然・人間科学研究、40、147-170.
- 田島美帆・中坪史典 (2021). 幼児教育アドバイザーの継続的な訪問は保育者と幼児教育施設に何をもたらすのか 幼年教育研究年報、43、35-46.
- 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (2017). 平成 28 年度「幼児教育の推進体制構築事業」実施に係る調査分析事業成果報告書 (2021/01/29 採録)
- 七木田敦 (2021). 幼児教育アドバイザー訪問と保育の質との関係について：SSTEW(「保育プロセスの質」評価スケール)による評定から 幼年教育研究年報、43、47-54.
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析 ナカニシヤ出版 京都
- 保育教諭養成課程研究会 (2018). 幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅣ 一園運営の一翼を担うミドルリーダーの育成を目指して—平成 29 年度文部科学省幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託「園長の運営を支えるミドルリーダーの人材育成に係る研修モデルの構築に向けて」報告書 (http://www.youseikatei.com/pdf/20180514_2.pdf) (2021/01/29 採録)
- 文部科学省 (2016). 幼児教育の推進体制構築事業 http://www.mext.go.jp/a_menu/sho-



- tou/youchien/1372594.htm (2021/01/29 採録)
- 文部科学省 (2018). http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1372594.htm, 2018.6. (2021/01/29 採録)
- 文部科学省 (2021). 幼児教育推進体制の強化 https://www.mext.go.jp/content/20210210-mxt-youji-000004376_1.pdf (2022/01/29 採録)
- 文部科学省 (2020). 令和元年度幼児教育実態調査 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2020/01/30/1278591_06.pdf (2021/01/29 採録)
- 山崎晃・松井剛太・越中康治・濱田祥子・東和子 (2021). 幼児教育アドバイザーの幼稚園への働きかけの変容を捉える、子ども学論集、7、15-26.
- 謝辞
本研究は科学研究費補助金（代表者：山崎晃 研究課題番号：19K02604）の助成を受けて実施した。



How does early childhood education adviser reflect on the training of kindergarten

Akira Yamazaki

Koji Etchu

Gota Matsui

Shoko Hamada

Kazuko Azuma

The aim of this study was to confirm the chronological changes of the advice and guidance done by early childhood education adviser, and to examine those changes dividing into four periods.

As results, in the first period, the adviser mentioned “the situation of child development” and “the tasks of kindergarten, carers and nursing”. In the second period, she mentioned “the recognition of organization and systematic differences among kindergarten, nursery school, and elementary school”. In the third period, the adviser mentioned “the guidance differences between kindergarten and elementary school”, “the development stage of infants”, “the interpretation of infant development stage”, and “the importance of carers' reflection”. In the fourth period, she mentioned “the full understanding of nursing contents and development” and “the attitude of carers to change their recognition and behavior improves the quality of early childhood education”. These results give important suggestions to the guidance and training contents done by early childhood education adviser.

Keywords: early childhood education adviser, support, change of process